

日本宗教学会 第 75 回学術大会

パネル発表要旨集

日時 2016年9月9日(金)－11日(日) パネル発表は10日午後・11日午後
 会場 早稲田大学 戸山キャンパス 31号館・32号館

開催パネル一覧

	部会	建物-教室	パネル題目	代表者
10日午後	2	31-204	井筒俊彦の「東洋哲学」における宗教と言語	澤井 義次
	5	31-201	宗教とウェルビーイングの比較宗教社会学	櫻井 義秀
	8	32-226	山岳宗教の再構築—英彦山における修験道復興運動を事例として—	亀崎 敦司
	10	32-228	宗教研究と地球環境問題—国際グローバル理解年のために—	木村 武史
	11	32-229	宗教を心理学することの意義と可能性	松島 公望
11日午後	1	31-205	現代宗教学におけるエリアード研究の展望	奥山 史亮
	2	31-204	「信教の自由」のパラドクス—単線的進歩史観を越えて—	藤原 聖子
	3	31-203	国学者「松山高吉」のキリスト教受容と宗教理解	洪 伊杓
	4	31-202	唯一神教の世界宗教史再考	市川 裕
	5	31-201	国を越えた共通の宗教的信念はあるのか？	川端 亮
	6	32-224	明治期における宗教体験の語りとその伝播	長谷川琢哉
	7	32-225	宗教的ケアとしての読経の効果とその応用	谷山 洋三
	8	32-226	日本・台湾・韓国における「水子供養」の歴史と現状	淵上 恭子
	9	32-227	震災後の宗教とコミュニティー関与型調査からの再考察—	弓山 達也
	10	32-228	人間を魂と受けとめる医療—医療者が信仰を持つ可能性—	馬淵 茂樹
	11	32-229	宗教の時代としての1930年代—メディア・博覧会・反宗教—	永岡 崇
	12	32-324	アフリカ宗教の重層構造と地域的多様性—宗教人類学のこころみ—	嶋田 義仁
	13	32-323	伝統的言語文化としての神話・昔話教育	大澤千恵子

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

井筒俊彦の「東洋哲学」における宗教と言語

井筒のイスラーム研究と意味論
井筒「東洋哲学」とその外部
宗教体験における根源現象から意味場の生成へ
井筒・東洋哲学におけるインド宗教思想と言語

代表者：澤井 義次
鎌田 繁 (東大)
島田 勝巳 (天理大)
小野 純一 (東洋大)
澤井 義次 (天理大)
コメンテータ：氣多 雅子 (京大)
司会：澤井 義次 (天理大)

東洋思想・イスラーム哲学研究で知られる井筒俊彦は、独自の「東洋哲学」を構想する中に、主要な宗教思想テキストを創造的かつ未来志向的に読み解くことによって、「東洋哲学」という思想的可能性を追究した。本パネルでは、井筒の言語論的視座に注目しながら、井筒・東洋哲学における宗教思想テキストの「読み」とその特徴について考察したい。本パネルは4つの研究発表、およびそれらの研究発表に関するコメントから成る。

まず、鎌田繁はイスラーム研究の視座から、井筒の「東洋哲学」における宗教と言語の関わりを論じる。井筒の意味論的研究では、語の意味はそれが置かれた関連語で形成される「脈絡」の中で初めてその意味を発揮すると考える。その観点からはいかなる語も「脈絡」なしには意味をもたない。井筒のクラーン研究はイスラームの出現によって大きな「脈絡」の変化をもたらしたことを明らかにした。この研究はある「脈絡」からある「脈絡」への転換を論じるものであった。意味論的研究の究極として意味の生成を視野に入れることもできるであろう。存在一性論は彼の「東洋哲学」論で重要な位置を占めるが、これは無「脈絡」からある「脈絡」への転換、すなわち、意味の生成、に目を向けたものであるといえよう。そのように考えることで意味論的方法が彼のイスラーム研究に一貫していることを確認する。

この鎌田の意味論的考察を受けて、島田勝巳は井筒独自の「東洋」概念の射程がプロティノスを結節点としていることを指摘したうえで、それが彼の「東洋哲学」の要諦たる言語的意味分節理論とプロティノスの流出論との理論的類似性に起因するものであることを論じる。さらに、その「東洋」のヴィジョンにとっての「外部」としてあるものが、初期の井筒が構想しながらも結局頓挫した研究領域、つまり、キリスト教神秘主義、特にその「エロスの形態」であった可能性を指摘し、その理論内面的

要因について検討する。

また小野純一は、井筒の「東洋哲学」探究が史的研究を踏まえた思想類型の構造化を超え、人間知性の構造を根底から見極める企図であったことを論じる。井筒によれば、体験の本源性で与えられる有限な「根源現象」は、思想を規定する哲学的普遍者として概念化される前段階で、体験者を取り巻く文化・伝統・言語に意味論的に規定され方向づけられているという。その方向性ごとに異なる世界観の類型が生起し、さらに具体化が進み、個々の思想として展開するという。彼はこの過程(意味フィールド化)を記述し、言語の根底に知の構造の根本原理を類型として探究するが、井筒がいかに関心ひいては知性の構成原理の仕組みに迫ろうとしたのかを考察する。

さらに澤井義次は、インドのウパニシャッドやシャンカラの不二一元論ヴェーダーンタ哲学、大乘仏教の中観思想や唯識思想などの宗教思想テキスト群が、井筒の哲学的思惟の根幹をなしていることを指摘し、これらの思想テキストの中に、彼が東洋哲学を貫く根源的思惟パターンを意味論的な視座から見いだしたことを論じる。インド宗教思想には、根深い「言語不信」が見られると井筒は言うが、彼が言語的意味分節理論によって、どのようにインド宗教思想の特質を読んだのかを検討する。

以上、これら4つの研究発表の内容に関して、最後に氣多雅子がコメントを行なう。さらに、氣多のコメントを踏まえて、パネリスト全員、およびパネル参加者による討議を行なう。このように本パネルは、井筒「東洋哲学」のおもな思想的特徴をめぐって、井筒の哲学的思惟を「宗教と言語」という視座から捉え直し、そのことによって、近年、わが国ばかりでなく世界的にも注目されている井筒「東洋哲学」の思想構造とその特質を解明しようとする試みの一つである。

宗教とウェルビーイングの比較宗教社会学

宗教とウェルビーイング研究の概観

神話とウェルビーイング

過疎地域の神社と若者の地方移住

多世代信者をつなぐ「協働」教会—複数教会の支えあい—

代表者：櫻井 義秀

櫻井 義秀 (北大)

平藤喜久子 (國學院大)

板井 正斉 (皇學館大)

川又 俊則 (鈴鹿大短大部)

司会：櫻井 義秀 (北大)

日本人は2011年の東日本大震災以降、あるいは本年の熊本地震を経験して、日本が自然の恵みと同時に災害にいつ何時でも直面する国土であることを痛感している。そして、人口減少社会、グローバル化する経済社会のなかで経済成長神話や物質的文化の限界をも認識させられた。高度経済成長期に築いた豊かさとしてのしあわせ感は急速に冷めつつある。

2014年の『宗教研究』(88-2)では「しあわせと宗教」という特集が組まれたが、宗教研究者のみならず同時代の人たちの危機意識に即したものであったといえる。しかしながら、掲載された論文では歴史宗教や現代宗教、および特定の宗教思想において「しあわせ」がどう認識され、文化的なかたちとして表れてきたのかを論じるものが過半を占めた。これはこれで意義深いことだが、現代の人文・社会科学におけるウェルビーイング研究と切り結ぶことなく、現代の日本人が求める「しあわせ」とも交錯しない宗教研究のあり様もまた、日本の公共空間における宗教の位置や、社会問題に直接関わるよりも一歩引いた俯瞰を得意とする宗教研究者のスタンスを示していたのではないかと。

本パネルでは、①この十数年の間に進展した国内外のウェルビーイング研究の蓄積を踏まえながら、研究グループ(日本学術振興会科学研究費 基盤研究(B)「人口減少社会日本における宗教とウェルビーイングの地域研究」(櫻井義秀代表 課題番号15H03160))による研究の進捗状況を報告し、②『宗教研究』特集号の趣旨を引き継ぎながら、宗教研究者にウェルビーイング研究との接点を持ってもらおうと考えている。③なお、その際に本研究が現代、地域社会、特定宗教の事例紹介に留まらないよう、神話学・宗教学、社会学・社会福祉学の観点、神道・仏教・キリスト教の事例をバランスよく配置しようと考えている。

発表者は四名であり、以下に発表の要旨を記載する。

- ①櫻井義秀 まず、心理学・経済学、社会福祉や社会医学で進められてきたウェルビーイング研究を概観し、健康や精神的豊かさという内的条件、仕事や生活と社会保障という外的条件、および主観的生活満足度という幸福感に、宗教意識と宗教活動がどのように関わるのかを概説する。そして、櫻井が進めてきた人口減少社会と寺院仏教の研究が、地方における高齢者のウェルビーイング研究と接続する可能性について若干の知見をまとめる。
- ②平藤喜久子 神話の歴史は人類の歴史と同じほど長いといわれ、現在でもさまざまな形で神話はわたしたちの社会のなかにあらわれてくる。はたして神話は、人間にとって必要なものなのだろうか。ウェルビーイングに資するものなのだろうか。ウェルビーイングという観点から神話学をあらためて見直し、神話が「幸せ」をもたらすのかを考えてみたい。
- ③板井正斉 「地方消滅」ショックは、地域神社の存続にも深刻な影響が出ると推測されている。その一方で、若者世代を中心とした地方移住者の増加も見逃せないとする指摘もある。両者の論点として、子育てや就労といったウェルビーイング要素とともに、祭礼をはじめとした宗教ネットワークの資源性もまた地方の人口減少課題に「しあわせ」観を創出できる可能性について、地域おこし協力隊等の活動事例から整理する。
- ④川又俊則 1950年代、北海道特別開拓伝道により創設された日本基督教団北海教区苫小牧地区(8教会を6牧師が担当)と、京都教区の明治期に農村伝道で開拓された教会(1970年、園部、須知、胡麻などの会堂が亀岡教会と合同し、丹波新生教会となり、その後、1教会4会堂で運営)を事例に、信徒と牧師の「協働」による教会運営、教会間での信徒の交流、多世代での交流により信徒のウェルビーイングが維持される状況を考察する。

山岳宗教の再構築—英彦山における修験道復興運動を事例として—

英彦山の修験道復興に関する現状
「修験」不在の山岳宗教—韓国・智異山の事例から—
なぜ松会は等覚寺に残ったのか
近現代の英彦山が失ったもの

代表者：亀崎 敦司

亀崎 敦司 (九大)

須永 敬 (九州産業大)

中村 琢 (福岡大)

白川 琢磨 (福岡大)

コメンテータ：中西 裕二 (日本女子大)

司会：亀崎 敦司 (九大)

本パネル発表は、北部九州の修験霊山である英彦山において進行しつつある修験道復興運動を中心的な事例として、現代の山岳宗教の動向について「過去」や「外」との対比に基づき考察するものである。

山岳宗教をめぐる研究は、宗教学・民俗学・歴史学などを中心にこれまでに膨大な研究を重ねてきた。実質的にその中心となっている修験道研究を例にとれば、民間信仰や習俗との関わりから修験道の影響を明らかにしようとする研究や、日本各地の霊山での修験道の組織、および儀礼や思想の解明を行う研究などが進められてきたと言えよう。そうした山岳宗教に関する研究は非常に多岐な対象や地域にわたっているが、一つ確かなことはこれまで積み重ねられてきた業績の大部分が歴史的な過去について言及してきたという点である。これは山岳信仰が固有信仰や外来の宗教と結びつき修験道として体系化され、近代の神仏分離運動によって終焉を迎えるという時系列的な山岳宗教史観を反映しているかのようにも見受けられる。

さて、本パネルの4人の発表者は、これまでに英彦山をはじめとする北部九州の山岳宗教について研究を進めてきた。フィールドを緩やかに共有しているというだけで調査の対象や扱う資料は各々異なっているが、発表者らに共通しているのはいずれも山岳宗教の「過去」と「現在」への両方の関心を持ち合わせている点である。すなわち、九州の修験道の一大拠点であった英彦山にて近年開始された修験復興運動(亀崎・白川)、日韓の山岳宗教の比較を目的とする現前の「生きた」宗教的職能者による実践への注目(須永)、過去から伝えられてきた幣切りの松会の継承に揺れる人びと(中村)といったように、山岳宗教を過去に行われた実践として限定するのではなく、同時代的に進行しつつある人々の営みに結びつけて捉えようとしている。発表者らがこうしたスタンスをとるのは、今まさに生起しつつある現象や運動を目の前にして強くひかれるからではあるが、復興のプロセスや背

景、および継承のメカニズムを捉えるにあたって、山岳宗教研究がこれまで積み上げてきた成果を活用した方がよりわかりやすいと考えるからである。このように、本パネル発表は専ら過去を対象として扱ってきた山岳宗教研究を現代宗教研究の地平に再定置することを視野に入れている。

最後に各発表者の発表内容についてももう少し触れておく。亀崎は、開始から2年あまりが経過した英彦山の修験道復興に関する現状を報告する。メディアへの露出等により徐々に周知されるようになってきた復興運動であるが、その主体である神宮と「担い手」となる英彦山を活動の拠点とする宗教的職能者たちとの関係に新たな転換点が生じつつある。

須永は、北部九州の山岳宗教を研究する傍ら韓国・智異山での調査を続けることによって得られた成果から、「修験」という求心力を欠き、個別化・多様化をキーワードとして特徴づけられる韓国の山岳宗教を日本との比較検討を通じて描き出す。

中村は、はじめに英彦山六峰の一つとされる修験霊山の等覚寺が、近世社会のなかでどう再興され生き抜いてきたのか、修験の儀礼である松会を手掛かりに検討する。次に、等覚寺の松会は、修験者が還俗した後も子孫によって特徴的な松柱における幣切りを含め続けられているが、このように今日なお続けられている理由を考察する。

白川は、まず制度・組織・儀礼といった観点に基づき、近現代の英彦山から失われたものを具体的に明らかにする。その上で、復興された神前読経や柴燈護摩に一研究者として参加し続ける立場から、喪失以前の英彦山をモデルにした宗教的システムの再構築に向けた復興プランについて考えを述べる。

コメンテータの中西は、4人の発表者と同じく北部九州の山岳宗教や宗教民俗について研究を進めてきた。計5名のパネリストから山岳宗教が現代と切り結ぶ地平について十分に議論を行ってみたい。

宗教研究と地球環境問題—国際グローバル理解年のために—

※国際委員会企画 日本宗教研究諸学会連合共催(英語一部使用)

宗教研究から見えてくる宗教と地球環境問題
環境問題に抱く恥の感情への宗教的応答について
仏教と環境運動
道教にみる人と自然の関わり—洞天思想を中心に—

代表者：木村 武史

カール・ベッカー(京大)

サラ・E・フレデリックス(シカゴ大)

馬場 紀寿(東大)

土屋 昌明(専修大)

コメンテータ：小原 克博(同志社大)

司会：木村 武史(筑波大)

企画の要約と意義：ユネスコと関連国際学術団体は2016年を「国際グローバル理解年(IYGU)」として位置づけている。21世紀に人類が直面する諸課題の一つに地球環境問題があり、様々な学術界からの問題解決に向けての貢献が求められている。このような要請に宗教研究に携わる研究者はどのように応答することができるのか。地球環境問題は複雑で重層的であり、宗教研究も多様であるので、このようなグローバルな要請に対する応答も多様に展開できるのではないか。本パネルでは、日米の宗教研究の最前線の声を聞き、いかに宗教研究がIYGUに貢献できるかについて議論を深めたいと思う。

ベッカーの発表内容：世界の宗教を見渡すと、それぞれ正反対に思われる価値観を唱えてきた例が目立つ。しかし表面的には違うように見える価値観や倫理観でも、「持続性」という観点から見ると、共通している事が分かる。例えば、人口の安定性、病因を避ける公衆衛生、労働倫理や所有物観念などについて、宗教は表向きには異なる掟を唱えていても、いずれの目的も社会や世界の持続性を目指すものであった。状況が激変する現在、各宗教の表面的な文言よりは、その裏に潜む智慧を宗教学的に理解すれば、地球環境に対して取るべき姿勢が見えてくる。資本や物質に還元できない精神に、人間が価値を置くように導けるかが、環境問題解決の鍵を握ると考える。

フレデリックスの発表内容：気候変動に関する従来の倫理的考察では社会的・感情的意味合いについてはあまり注意が向けられてこなかった。気候変動における自分自身の役割について恥を感じることによって環境への倫理的コミットメントを認め、促すことができるようになると考えられる。それゆえ気候変動に関する倫理的感情、

特に恥の問題は倫理的な応答を考察する際に重要である。宗教倫理研究者はこの点で特別な役割を果せる。というのも人間の限界性を示し、自然の再生の儀式でこれらの理想を示す宗教的な人間性の概念と倫理的理想とを結びつけられるからである。これらの三つの要素は、恥の感情の陰にある否定的な行為と自己の概念に対処するために必要であり、個人と社会にとって新たな方法を見出し、実現することが可能となる。

馬場の発表内容：環境運動を人々に促す動機、環境運動が成功する条件という視点で、仏教と環境運動について論じる。第一に、環境保全を促す、あるいはその動機づけになる(可能性のある)初期仏典や大乘仏典の思想を検討する。第二に、奥入瀬川の環境保護運動にかかわった自らの経験から、日本の環境運動に広く見られる動機について考察する。第三に、環境運動が成功する条件をめぐる先行研究を踏まえて、今後の環境運動において仏教の果たしうる役割を指摘する。

土屋の発表内容：「道教」は中国古来の神仙思想や道家思想から成り立った宗教である。「洞天」とは、道教の世界観のうち、山中の洞窟内にある神仙世界であり、その世界は通路によって別の洞天と結びついているとされる。洞天にもとづく考え方を「洞天思想」という。洞天思想は、カルスト地形の洞窟の神秘に対する畏怖に由来する。五世紀半ばの道教では、洞天思想はすでに中核的であった。洞窟だけでなく、洞窟が存在する山岳が宗教的な重視を受け、そこにある植物・動物・鉱物・景観などが特殊な意味を持っていた。洞天思想から、道教にみる人と自然の関わりについて考察したい。

最後にコメンテータの小原から各発表へのコメントをしてもらい、議論を深める。

宗教を心理学することの意義と可能性

「宗教性」概念から宗教を心理学する
 心理学的研究という手法の特徴とその成果
 「卒業証書」と聖人からみる子どもの死の受容と宗教性

代表者：松島 公望

松島 公望 (東大)

荒川 歩 (武蔵野美術大)

大村 哲夫 (東北大)

コメンテータ：寺田 喜朗 (大正大)

司会：松島 公望 (東大)

「宗教を心理学する」とは、宗教にまつわる事柄を調査データに基づいて論じていくことであり、実証的宗教心理学的研究を指している。実証的宗教心理学的研究は、日本においても百年近い歴史があるが、心理学会、宗教学会共に、今なお学会での地位は獲得していないといえる。

そのような状況ではあったが、2000年代以降、変化の兆しが見えてきた。2003年に宗教心理学研究会が発足したことを契機に、その活動の幅が広がっている。2005年度、2012年度に実証的宗教心理学的研究をベースとした科研費研究プロジェクトの活動、2011年には『宗教心理学概論』が、2016年には『宗教を心理学する』が刊行された。それと並行する形で心理学会、宗教学会での活動も展開され、少しずつではあるが、近接分野との連携・協働が行われるようになってきている。

これら近年の状況を踏まえて、本パネルでは改めて宗教を心理学することの意義と可能性について議論する機会を持ちたい。3つの研究発表を行い、その上でコメンテータよりこの研究分野の意義、課題について言及してもらうことにより、宗教研究の新たな可能性について検討したい。

発表1: 「宗教性」概念から宗教を心理学する 松島公望

宗教性とは、「個人がどの程度宗教に関与しているのか」を測定する指標であり、個人が宗教についてどの程度、「信じるのか、感じるのか (宗教意識)」「振る舞うのか (宗教行動)」を表している。つまり、宗教意識と宗教行動を包括する枠組が宗教性といえる。また、C. Y. Glockによる宗教性の説明を踏まえると、宗教性とは「宗教にまつわる事柄 について、知り、信じ、感じ・体験し、行い、それらの影響を受ける」ことを意味する概念である。この「宗教性」概念から宗教を心理学する根拠を示したいと考えている。その上で、宗教を心理学する際の注意事項を提示し、実証的宗教心理学的研究の適用範囲についても言及する。

発表2: 心理学的研究という手法の特徴とその成果

荒川 歩

「人の心理がどのようなものか」というのは、ある意味では誰でも知っており、経験を積み上げていくなかでより理解を深めるものだと考えられている。では心理学は不要か? 学問としての心理学の起こる背景には、「人が知っているつもり」「理解が深まっているつもり」のものがいかに誤謬を多く含んだものであるかの気づきにあった。19世紀の研究者たちは、こんなに誤りを含んだ直感に基づいては正しい結論には至れないのではないかと考えた。そこで、心理学が生まれ、そこでは、自分の思い込みや、自分の思い通りの結果が出たと言いたい気持ちに打ち勝つ方法が発展していった。心理学実験法や、心理統計と呼ばれるものである。本報告では、これらの手法の特性とその限界を紹介した上で、宗教に関する最近の心理学の研究とともに、『宗教を心理学する』(松島他(編)、2016)に関して行った研究を紹介する。

発表3: 「卒業証書」と聖人からみる子どもの死の受容と宗教性 大村哲夫

現代人は、果たして合理的に生きているといえるだろうか? 相撲やラグビーの選手がここ一番に routine と呼ばれる動作を行ったり、一攫千金を夢見て大当たりが出た宝籤売り場に並んだり、受験の前に天神参りを行ったりするのは、なぜだろうか? 「信仰はもたない」としながらも、墓参りを欠かさないのは何なのだろうか? 東日本大震災の被災地では、死亡した児童生徒に卒業証書を授与している。死亡して学籍を喪失した子どもに授与することに法的な根拠はない。どんな意味が込められているのだろうか? 発表者は、こうした非合理的な行為に関心を持ってきた。人が非合理的な行為をとる時には、心理的に深い意味がある。今回は、科研による卒業証書授与調査から殉教者まで、非業の死を遂げた子どもの死の受容について、その宗教性と心理について話題提供したい。

現代宗教学におけるエリアーデ研究の展望

代表者：奥山 史亮

エリアーデにおける宗教史学と宗教現象学の受容と批判
 宗教史学をめぐる差異と反復—ペッタッツォーニとエリアーデー
 オランダ宗教現象学派とエリアーデー時間論をめぐる—
 エリアーデ研究の現況と現代におけるエリアーデの意義

奥山 史亮 (北海道科学大)

江川 純一 (東大)

木村 敏明 (東北大)

藤井 修平 (東大)

コメンテータ：鶴岡 賀雄 (東大)

司会：奥山 史亮 (北海道科学大)

現代の宗教学・宗教史学は、進化生物学・認知科学に基づいた研究の台頭を受け、個別具体的な宗教的伝統とは異なる「宗教」を研究対象にすることは可能かという問題が改めて突きつけられている。このような研究動向に於いて、宗教学・宗教史学の古典的研究を再評価する必要性が指摘されるようになった。しかし、ミルチャ・エリアーデ (1907-1986) に関しては、いまだにポスト・コロニアルに触発された批判が向けられるばかりで、その宗教理論が現代的な視野から詳細に検討されてきたとは言いがたい。本パネルでは、現代の宗教研究が抱える諸課題を整理しながら、エリアーデの宗教理論の捉え直しを試みる。

エリアーデはイタリアの宗教史学、およびオランダの宗教現象学に関する研究に着手することによって、宗教学・宗教史学という学問分野をルーマニアに紹介した。エリアーデと両国の研究者たちは、宗教研究の方法論について見解を交わしながら、「聖」「時間」「儀礼」といった基礎概念を明確化していった。イタリアからルーマニア、オランダに至るこのような宗教学者たちの交遊は、宗教学・宗教史学の成立史に多大な影響を及ぼし、その内容を原典に基づき再検討することは、「宗教」研究の可能性を問う上で不可欠の知見を提供するものである。しかし現状では、宗教概念批判を経てエリアーデに関する研究が急速に減少したため、未整理のままとなっている。今回は、エリアーデが宗教史学派と宗教現象学派をどのように批判・継承したのかを整理しながら、古典的な宗教学が担い得る現代的役割を示したい。上記を踏まえ、本パネルの構成は以下の通りである。

まず、奥山が、エリアーデが宗教史学派と宗教現象学派を受容・批判した過程を概観した後、両学派をめぐるクリアーヌの見解との異同を明らかにする。クリアーヌは、宗教史学派および宗教現象学派を積極的に学びながら、エリアーデ後の宗教研究の方法を模索した。本報告

では、宗教学説史上におけるエリアーデとクリアーヌの位置付けを明らかにすると同時に、クリアーヌが叙述を試みたポスト・エリアーデ時代の宗教研究の特徴を示す。

次に、江川が、1880年創刊のフランスの『宗教史雑誌』、ペッタッツォーニ、そしてエリアーデを対象に「宗教史学」概念の系譜をたどり、イタリア宗教史学の祖であるペッタッツォーニと、エリアーデの学問とのあいだの共通点と差異を明らかにする。その上で、宗教史学という問題系について、21世紀の現在、どのように考えればいいのかについて考察する。

続いて、木村がオランダの宗教現象学者ファン・デル・レーウがエリアーデ宗教学とどのように対峙したかを、「時間」概念を鍵に考察していく。時間論はソーセイ以来、宗教現象学派の主要なテーマの一つであり、レーウも基本的にその流れに立脚した時間論を展開している。その集大成とも言える「根源の時と終末の時」(1949年)には同年発刊の『永遠回帰の神話』への言及があり、また逆に英語版の後者では前者が参照されている。本発表ではこれらのテキストをもとに宗教現象学派の伝統とエリアーデ宗教学の連続性と相違、およびその背景について考察する。

最後に、藤井がエリアーデ研究の現況と現代におけるエリアーデの意義を論ずる。近年はエリアーデを思想家として扱う研究が主であり、その宗教理論の検討はほとんど行われていない。しかし、現代の進化生物学・認知科学に基づく宗教理論はエリアーデ理論において批判された普遍主義、本質主義の要素を保持しつつ展開しているのであり、本発表はこうした状況においてエリアーデが現代においても意義を有していることを示す。

四人の発表を受け、鶴岡が宗教学説史上のエリアーデの位置づけという観点からコメントを示した後、討論に移行する。

「信教の自由」のパラドクス—単線的進歩史観を越えて—

代表者：藤原 聖子

藤原 聖子 (東大)

佐藤 清子 (国士館大)

ジョリオン・トーマス (ペンシルバニア大)

伊達 聖伸 (上智大)

コメンテータ：千葉 眞 (国際基督教大)

司会：藤原 聖子 (東大)

「信教の自由」研究動向—普遍性・規範性への疑義—
 19世紀合衆国プロテスタントと普遍的信教の自由の要求
 日米関係における信教の自由—特殊性と普遍性の問題—
 現代ケベックにおける複数のライシテ観の競合と信教の自由

近年、「信教の自由」をめぐる新たな研究気運が国内外で高まっている(代表的な研究文献として、W. F. Sullivan, E. S. Hurd, S. Mahmood and P. Danchin, *Politics of Religious Freedom*, 2015; E. S. Hurd, *Beyond Religious Freedom: The New Global Politics of Religion*, 2015; A. Su, *Exporting Freedom: Religious Liberty and American Power*, 2016, 和田守編著『日米における政教分離と「良心」の自由』(2014))。それは一方では、「信教の自由」や「政教分離」が今まさに脅かされているという危機意識が国境を越えて共有されていることを背景とするが、他方では、「信教の自由」原則そのものとのらえ方やその成立史に対する根本的な見直しが宗教学・政治学・法学などでそれぞれに着手されていることの表れである。それはすなわち、前者の問題は、従来考えられていたような「西洋近代的リベラリズム」を浸透させれば本当に解決するのか、あるいはそもそも「信教の自由」原則は西洋社会において啓蒙主義とともに生まれ、近代化とともに発展・拡大したという歴史観は正しかったのかといった問題意識に突き動かされているということである。本パネルは、このような最新の国際的研究状況を整理し、そこで提起されている諸問題をクリアにするとともに、これまでの単線的進歩史観によらない「信教の自由」思想・制度の成立史に関する、若手～中堅の研究者による独自の研究成果を発表する。

司会かつ第1発表者の藤原は、信教の自由をめぐる研究動向を分析し、ケーススタディとしてはイギリスの宗教教育史を信教の自由のポリティクスという観点から読み解く。第2発表者の佐藤は、アメリカの「信教の自由」思想成立史について新たな解釈を試みる。一般的理解では、アメリカでは1791年の憲法修正第一条によって、政教分離と信教の自由が保障されたと考えられている。しかし佐藤は、信教の自由が基本的人権でありそれは普遍的なものであるという考え方は、プロテスタンティズム

と折衷されながら漸進的に浸透し、20世紀に入って確立に至ることを、19世紀宗教史の分析から浮かび上がらせる。当時のプロテスタントによる信教の自由を求める請願運動を事例として、信教の自由の実現が、事実上各国政府の権力関係に依拠していたこと、また、信教の自由が、特定のタイプの宗教性を優遇したり、逆に差別したりするために主張され、機能していたことを指摘する。第3発表者のトーマスは、日本の信教の自由原則は、対日戦後政策の一環としてアメリカからもたらされたという一般的理解に異議を唱える。信教の自由は普遍的な人権であるという考え方はアメリカにもとからあったのではなく、むしろ占領政策を立てる中で形成されていったことを明らかにする。すなわち、(佐藤が指摘するような)19世紀の段階ではプロテスタントの利害関心に基づく思想・制度であった「信教の自由」が、普遍的人権として昇華される大きな契機となったのは、アメリカの国家神道との対峙だったということである。第4発表者の伊達は、カナダ・ケベック州を事例に、政教分離(ライシテ)という、本来、信教の自由の制度的保障であるはずの原則が、現在はむしろ信教の自由を制限するような事態をもたらしていることを指摘する。まず、2000年代の「ARの危機」から2013年の「ケベック価値憲章」に至るまでのケベック社会の議論を検討し、「ライシテ」対「信教の自由」という構図の語り方も生まれてきていることを示す。続いて、ケベックでは、多文化主義との関係において、信教の自由が宗教的マイノリティの権利の保護に用いられる反面、マジョリティが、自分たちにも信教の自由があるという論理で、従来の「進歩主義的な信教の自由」に歯止めをかける動きを見せていることを論じる。コメンテータには、信教の自由と日米の宗教史の関係について造詣が深く、C. Taylor, *A Secular Age* の翻訳を進めている政治思想史の専門家を招いた。

国学者「松山高吉」のキリスト教受容と宗教理解

代表者：洪 伊杓

松山高吉—その生涯と資料調査の現状—

岡田 勇督 (京大)

松山高吉の伝統宗教理解—「神道・仏教・儒教」三教を中心に—

洪 伊杓 (京大)

松山高吉の聖書翻訳原則—受容者としての聖書翻訳者—

金 香花 (京大)

松山高吉と日本語聖歌・讃美歌の翻訳—音と詞を中心に—

長畑 俊道 (東大)

コメンテータ：岩野 祐介 (関西学院大)

司会：岡田 勇督 (京大)

日本の初代キリスト者の一人である松山高吉(1846-1935)は、日本組合基督教会や同志社の創立過程でも活躍した人物である。また国学者出身のキリスト者また近代人として、日本の伝統宗教を初めて本格的に評価した。そして、初期の聖書翻訳や讃美歌編纂も彼の貢献を除いて説明出来ない。しかし松山は新島襄の死後、熊本バンドと対立し、結局組合教会と同志社から離脱して聖公会に転会した。その結果、彼の活動や思想的な影響力に関する研究は見逃されて来た。この点から今回のパネル発表は、現在まで公開されていない史料の分布と現況を調べ、今後の研究課題を提示し、新史料に基づいて、国学者出身のキリスト者であった松山が、日本の伝統宗教をどのように理解したのか、また彼の中心活動であった聖書翻訳と讃美歌編纂の中での立場と活動の意義を考察する。

岡田勇督：松山高吉—その生涯と資料調査の現状—

松山高吉とその業績については、その重要性に比してほとんど知られていないのが現状である。神道家であった松山はキリスト教に改宗後、まず草創期の同志社を新島襄と共に支え、社長代理、理事などを歴任。また女子教育に関しても、神戸女学院や平安女学院などの創設に携わり、日本最初の讃美歌集である『新撰讃美歌』、各派共通の『さんびか』、また聖公会における『古今聖歌集』などを担当。聖書翻訳では、文語訳聖書の元訳から改訳まで通じて日本側の翻訳委員を務めている。本報告では、彼の時代状況を知るためその生涯を通覧する。そして、松山高吉の一次資料の調査状況と、そのスキャン作業についての報告がなされる。

洪伊杓：松山高吉の伝統宗教理解—「神道・仏教・儒教」三教を中心に—

平田篤胤系の国学者であった松山高吉は、キリスト者になった後も神道を中心とした日本の伝統宗教とキリスト教の関係に関する研究を持続した。同志社で「日本宗教史」、「国史」などを教えながら、キリスト者また近代人として日本の伝統宗教をどのように解釈すべきなのか

という問題に対する様々な論説と講義録を残した。国学者であった松山は伝統宗教に対する深い理解から、その宗教史的な研究を展開した。彼は西洋のキリスト教神学理論が本格的に波及される前段階において主体的な伝統宗教解釈を試みたため、日本宗教学研究史においても再考察すべき人物だろう。

金香花：松山高吉の聖書翻訳原則—受容者としての聖書翻訳者—

松山高吉は明治元訳(新・旧約)から大正訳の新約聖書にまで、直接に日本語聖書翻訳に取りかかった人物である。新約聖書の改訳に於いては、翻訳原則も提示した。この翻訳原則は溝口靖夫の研究により知られているが、その原則に対する分析はなされていない。しかし、この翻訳原則には松山が関心を持って取りかかったものが多く反映されている。従って本発表に於いては、この聖書翻訳原則を取り上げ、その特徴を構成する要素を分析する。キリスト教伝播と受容のプロセスの中に国学者であった松山高吉を置き、受容者としての聖書翻訳者という視点からの分析を試みる。

長畑俊道：松山高吉と日本語聖歌・讃美歌の翻訳—音と詞を中心に—

神戸女学院図書館には、松山高吉による書き込みのある『聖公会歌集』(1883)がある。これは『新撰讃美歌』(1888)作成のための書き込みであった。その全体は『新撰讃美歌 研究』(神戸女学院編、1999)にまとめられている。今回は、この書き込み部分について、原詩と旋律と翻訳詞を具体的に比較検討することにより、松山がどのように拍節音楽である西洋の旋律を捉え、英詩を読み、日本語詞を選んだかについて考察する。松山が関わった聖公会の他の聖歌集も参照し、神道出身のキリスト者における、明治期の西洋音楽の受容の一面が浮き彫りにされることを目指している。

上記の発表について、コメンテータが日本宗教史、またキリスト教史における松山高吉の宗教思想と活動の意義を評価し、課題と展望も論ずる。

唯一神教の世界宗教史再考

代表者：市川 裕

唯一神教の二つの流れとその源流

市川 裕 (東大)

原始キリスト教を巡る社会状況と後の方向性への萌芽

土居 由美 (立教大)

「長い古代末期」の宗教史を書く—ローマの遺産と諸宗教の変容—

中西 恭子 (東大)

イスラーム統治下のユダヤ教徒に関する通史的視点の考察

嶋田 英晴 (國學院大)

コメンテータ：葛西 康徳 (東大)

司会：市川 裕 (東大)

日本の高等教育で行われてきた世界史の記述には、ある種の先入観念があるように思われる。世界史で扱われるキリスト教は、ユダヤ教から離脱してローマ帝国で発展する歴史が主として論じられているが、その場合、ユダヤ教は閉鎖的な民族宗教と見なされ、ナザレのイエスはそうしたユダヤ教の律法主義を批判してその形式主義や排他性を克服し、神への愛を説いて世界宗教へと発展させた、という見方が定着している。ユダヤ教の律法主義は克服されるべきものとされ、キリスト教が出現した暁にはもはやその存在意義は失われたかのようである。しかも、キリスト教の出現後、パレスチナのユダヤ社会はローマ帝国との2度の戦争によって神殿は破壊され、エルサレムはローマ式都市へと大改造され、ユダヤ人はエルサレムから追放されていった。ユダヤ国家は存在を失い、歴史の舞台から去り、ユダヤ人の精神を支えてきた宗教も、もはや顧慮するに値しないと思われかねない。

しかし、ユダヤ教は今日まで存続しているばかりか、今日のユダヤ教を構成している精神とは、ローマとの2度の戦争によって破壊された後に復活を遂げたラビ・ユダヤ教のそれであり、ミシュナ・タルムードを根底に据えた啓示法の宗教としてのユダヤ教である。これは、敢えて言えば、イエスが批判したとされる律法主義のユダヤ教そのものである。律法主義は否定されるどころか、神と人間とを結びつける宗教的アイデアとして、書物の宗教としてのユダヤ教を特徴づけるものに他ならない。

ところで、ユダヤ教とイスラームの理解に関して注目すべきことは、その宗教構造が酷似していることである。イスラームはユダヤ教と同じく啓示法の宗教であり、ユダヤ教ではこれをハラハーHalakhah、イスラームではシャリーア Sharia と呼ぶ。神の啓示はユダヤ教では総称してトーラー(教え、律法)と呼ばれ、成文トーラーと口伝トーラーの二要素で構成されるが、イスラームでは前者がコーランに、後者がハディースに対応する。そして、両宗教とも、その後に法学が発展し、レスポンサ文学が

発展する、という具合である。もし、ラビ・ユダヤ教からイスラームへの啓示法体制の展開が認められるならば、日本の高校世界史の教科書に見られるユダヤに関する記述の偏りは、修正が必要であろう。

本パネルでは、ユダヤ教の描き方を変えることによって、中世に展開する西欧キリスト教世界とオリエントのイスラーム世界に至る唯一神教の二つの流れが、より現実的に即した形で把握できると考えられる。本パネルは、王朝交代の歴史としてではなく、宗教文化の形成という観点から、東西の唯一神教の文化的相違をもたらした歴史的展開を捉えるべく、諸論点を考察したい。

市川は、中世キリスト教社会の俗人法と宗教法に二分される社会とイスラームの啓示法としての一元的権威とを対比させ、その源流を古代ユダヤからの異邦人キリスト教への発展と、ラビ・ユダヤ教の啓示法体制への分離として説明し問題提起とする。

土居は、ユダヤ教内部の改革的運動に端を発して原始キリスト教共同体が成立していく社会背景・状況について、ユダヤ教シナゴグや「異教」の寺院の共同体としての社会的在り様、個人による宗教上の選択、貧者や不平等と救済に関する姿勢を中心として概観し、視点を整理する。

中西は、北西ユーラシアにおける3世紀末から8世紀までの「長い古代末期」の宗教史を通史として書く困難について、西方と東方におけるローマ帝国の遺産の継受・キリスト教の複数性・「異教」の残存と変容を軸に考察する。

嶋田は、イスラーム共同体(ウンマ)におけるユダヤ教徒の境遇の変遷を、実際にユダヤ教徒に課せられた税の種類の変化を中心とする経済的観点から考察する。

葛西は、コメンテータとして、古典学の立場から、古代ギリシア・ローマ宗教と一神教との関係についての問題点を指摘するとともに、本テーマに関する今後の展望についてコメントを行う。

国を越えた共通の宗教的信念はあるのか？

因子分析による宗教的信念の共通構造
 確率モデルによる宗教的信念の1次元の共通構造
 宗教的信念の国際比較のための用語について
 宗教的信念の国際比較と日本の特殊性について

代表者：川端 亮
 川端 亮 (阪大)
 渡辺 光一 (関東学院大)
 宮嶋 俊一 (北大)
 島菌 進 (上智大)
 司会：川端 亮 (阪大)

本報告は、科研費基盤研究(A)「生命主義と普遍宗教性による多元主義の展開—国際データによる理論と実証の接合—」(研究代表者：星川啓慈、課題番号 25244002)の成果についての発表である。この研究では、宗教の、特に信念の側面について、国にかかわらず、共通の要素によって構成される共通の構造を見いだすことができるかどうかについて、質問紙調査によるデータを分析し、その結果を理論的な観点から検討することを目的としている。平成25年度には、これまでの宗教的信念に関する質問文を収集し、その内容を精査検討した。平成26年度には、宗教的信念を比較的細かい要素に分解し、それらを幅広く、およそ200項目とりあげて、8カ国で予備調査を実施した。8カ国は、いわゆる世界的宗教のそれぞれの宗教伝統(主流宗派)を代表し、また実際にWebによる調査が実施可能な国として、インド、トルコ、日本、アメリカ、イタリア、台湾、タイ、ロシアを対象とした。その結果を分析し、さらに項目を100項目まで精選した上で、平成27年度には、同じ8カ国の20~59歳の男女を対象に本調査を実施し、各国500人以上、合計4,298の有効回答を得た。

第1報告(川端亮)では、「因子分析による宗教的信念の共通構造」というタイトルで、平成27年度に実施した宗教的信念に関する意識調査の分析結果を報告する。Web調査の特徴、集計結果に見られる各国の特徴、ならびにこの分野で伝統的に用いられてきた因子分析の手法を用いて、共通の因子構造が見いだせるかどうかを探索する。

第2報告(渡辺光一)では、「確率モデルによる宗教的信念の1次元の共通構造」というタイトルで、それぞれの宗教的信念の諸要素への賛成確率から、各国に共通の宗教的要素が多数あり、8カ国共通の1次元の宗教構造が見いだせること、従来手法は回答者の宗教度(能力)や信念要素の難易度を捨象しているため1次元の共通構

造を検出できなかったことを、酒と料理(ワインと肉とチーズなど)の分かり易い例を用いて報告する。

以上の2つのデータエビデンスに基づく報告に対して、宗教学で用いられる諸概念と照らし合わせて、調査結果からどのようなことが言えるのか、あるいは言えないのかを、その方法から結果にいたるまで、幅広く検討を試みるのが後半の2つの報告である。

第3報告(宮嶋俊一)は、「宗教的信念の国際比較のための用語について」というタイトルで報告する。今回の国際比較調査はかつてなく大規模、かつ詳細なものであり、有意義な成果を生むと思われる。他方、文化依存性の高い宗教用語を、国際比較のためにより平易で翻訳しやすい一般的な表現にパラフレーズする(例えば「終末」を「世界には終わりがある」に、「輪廻転生」を「人は生まれ変わる」に、など)中で、さまざまな課題が浮き彫りとなった。第3報告では、国際的比較研究のための用語の選択について、調査結果を参照しながら検討する。

第4報告(島菌進)は、「宗教的信念の国際比較と日本の特殊性について」というタイトルで報告する。宗教性の国際比較調査においても、また今回の調査結果においても、日本では宗教性が低いという結果であった。これはそのまま適切な言明として受け取ることができるのだろうか。それとも調査の設計自体に問題があるのだろうか。また、日本の宗教の特殊性を考慮した新たな調査の必要性を示唆するものだろうか。こうした問いはまた、世界で共通の宗教的信念の尺度を措定することが妥当かどうかという問題にも通じる。これらの問いに応答を試みる。

以上の実証と理論の検討を通して、今までの宗教研究が明らかにしてこなかった、宗教意識の普遍性・特殊性の議論に寄与できるとともに、宗教概念、宗教性、宗教意識の間の相互関係を検討することで、多元主義の研究のための羅針盤ともなることも期待できるだろう。

明治期における宗教体験の語りとその伝播

宗教的「実験」の系譜—原坦山の心性実験録—
 哲学者・清沢満之と浩々洞物語
 近角常観の実験とその物語
 体験の言説化とその変奏—綱島梁川から西田天香へ—

代表者：長谷川琢哉

長谷川琢哉（親鸞仏教センター）
 名和 達宣（真宗大谷派教学研究所）
 岩田 文昭（大阪教育大）
 古荘 匡義（龍大）

コメンテータ：深澤 英隆（一橋大）

司会：長谷川琢哉（親鸞仏教センター）

近代においては既存の宗教的権威の弱体化等にもない、宗教的真理を実証する「宗教体験」の重要性が高まったと指摘される。明治期の日本でも、明治30年代を中心に「宗教的実験（体験）」が盛んに取り沙汰されるようになったが、このことはそうした動きを例証するものである。ところで、今日宗教体験を論じる場合、体験を言葉による媒介から切り離して論じることは困難である。言語や文化的な解釈の枠組みが体験それ自体の成立に深く関わっているという視点は、宗教体験そのものの強度を考慮する際にも不可欠となっている。

そこで本パネルでは、明治期日本でいわゆる「宗教体験」がどのような言葉によって語られ、またその語りがどのような影響を与えていったのかということ、いくつかの事例から検証していく。宗教体験の語りが別の体験を生み出したり、あるいは体験そのものが新たな権威となっていく様を見ていくことで、近代日本における宗教体験の諸効果に光を当てるのが本パネルのねらいである。コメンテータには、宗教体験論、神秘主義論争に精通し、明治の宗教思想にも造詣の深い深澤英隆氏を迎え、宗教体験と言語をめぐる問題をより多角的に考察する。

なお本パネルは、吉田久一基金研究プロジェクト「仏教思想を中心とした日本近代思想の再考」の一部として企画されたものであることを付言しておきたい。

【長谷川琢哉】東京大学で最初に「仏書講義」を担当した原坦山（1819-1892）は、幕末から明治にかけて、西洋医学と禅定体験を重ねあわせる独自の議論を展開した。「心性実験録」とも名づけられたその試みは、生理学的・解剖学的「実験」と生きられた身体経験（「実験」）を二重に主題化したものであり、日本における近代的な「宗教体験論」の源流として位置づけることができる。本発表では、「実験」という用語を鍵語とした坦山の議論から、明治期日本の宗教体験論に含まれる諸問題を浮かび上がらせることを試みる。

【名和達宣】清沢満之（1863-1903）は、絶筆「我信念」のなかで、論理や研究とのせめぎ合いを通して確立した「信念」について表白し、それによって得られる幸福を「毎日毎夜に実験しつつある所の幸福である」と語った。このような「実験」を重視する視座は、私塾・浩々洞の門下に継承され、同時にまた、多くの門弟たちは師との出会いの体験（回心）を感動的に語っていった。本発表では、そのような歴史的背景から構築された宗教体験をめぐる「物語」の意義と問題性について、清沢自身の語りの変化や師弟間のギャップなどにも着目しながら確かめていきたい。

【岩田文昭】近角常観（1870-1941）の決定的回心の回顧談は、『懺悔録』などを通して広く世の中に知られていった。しかしながら、求道会館に残された回心前後のノートを見ると記載されたような回心談は、回心後、しばらくしてから構築されたものと想定される。ここには「実験」の「物語化」の具体例が認められる。他方、浄土教の歴史を顧みれば、法然や親鸞は、自身の回心を物語化することなく、その弟子たちによってそれがなされた。回心の物語化をめぐる、常観と親鸞らとの異同の意味を本発表では考察したい。

【古荘匡義】宗教体験と体験の言説との間には原理的に「ズレ」が生じ、しばしば宗教体験およびその言説の「真正さ」が問題になる。本発表では、この「真正さ」を体験の言説の伝播において考える。例として、綱島梁川（1873-1907）が宗教体験から展開させた思想と西田天香（1872-1968）によるその「変奏」を分析する。西田は綱島の言説を評価したが、それを文字どおり受容して実行したのではなく、独自の言説や実践を生み出した。そこで、綱島および西田による体験の「言説化」の過程を解明することによって、互いが互いの言説に敬意を示しながら「変奏」する関係においてこそ、宗教体験とその言説の「真正さ」を問うる、という仮説を提示する。

宗教的ケアとしての読経の効果とその応用

代表者：谷山 洋三

谷山 洋三（東北大）

奥井 一幾（神戸松蔭女子学院大）

森田 敬史（長岡西病院）

今井 洋介（新潟県立がんセンター新潟病院）

コメンテータ：高橋 原（東北大）

司会：谷山 洋三（東北大）

スピリチュアルケアから宗教的ケアへ
 経文聴取による悲嘆軽減に関する測定実験の概要
 宗教的ケアの意義—宗教者の立場から—
 宗教的ケアの意義—医師の立場から—

東日本大震災後の支援活動においては、宗教者による活動が注目され、この流れに沿う形で臨床宗教師の養成が始まった。当初は被災地での活動が想定されていたが、すぐに緩和ケア分野での活動を踏まえた研修内容に進化し、これに呼応するように、医療福祉分野における潜在的ニーズが顕在化し始めている。実際に、医療者向け専門誌の『緩和ケア』誌2012年3月号において18年ぶりに宗教的ケアの特集が組まれたほか、沼口医院（岐阜）やオレンジホームケアクリニック（福井）などの在宅ケア、東北大学病院（宮城）、松阪市民病院（三重）、菊南病院（熊本）など国公立病院など、全国で臨床宗教師が雇用される動きが加速している。従来のような宗教色の薄いスピリチュアルケアだけでなく、宗教者ならではの支援方法として読経や祈りなどの宗教的ケアの意義も再評価されている。

「宗教的ケア」という言葉が用いられているように、この動きは宗教界内部に収まりきるものではなく、医療福祉と宗教の連携による臨床応用の可能性という文脈で検討されなければならない。そこで、宗教的ケアの諸方法のうち国内での応用範囲が広く、かつその効果の実証が進んでいないアプローチとして仏教経典（偈文を含む）の読経に注目し、経文聴取の効果を客観的に測定する実証実験を行った。科研費「喪失と悲嘆に対する宗教的ケアの有用性とその専門職育成についての研究」(基盤研究(B)、研究代表者：谷山洋三、課題番号：25284015)による実験である。

この実験により一定の有用性が示唆されたため、本パネルにおいてその成果を共有するとともに、臨床宗教師、臨床仏教師などの増加にともなって今後さらに拡大するであろう宗教的ケアの応用方法、適用範囲、担い手など

について議論したい。個々の発表者の発表内容は次のようなものとなる。

谷山洋三は、国内におけるスピリチュアルケアおよび宗教的ケアに関する動向を概観し、医療福祉や、東北および九州の震災被災地におけるニーズへの対応方法、グループケアにおける応用の可能性について考察する。

奥井一幾は、本研究におけるデータ解析者の立場から、経文聴取による悲嘆軽減に関する測定実験の概要について報告する。数ヶ月間飼育した金魚が処分される（実際には処分されない）という告知（ストレッサー）に対して、読経の介入を行った結果、心理尺度については、用いた全尺度で有意差は示されなかった。しかし、生化学的指標（ α -AMY 活性）では、介入群の値で有意な減少傾向が示された。これは、身体のコルチゾールが低減したことを意味し、読経という介入に対して、心理的よりも、身体的な反応が先行して示される可能性が示唆された。

森田敬史は、宗教者（仏教者）の立場から、仏教を背景とする緩和ケア病棟であるビハラー病棟のビハラー僧としての経験、および東日本大震災での宗教者としての経験に基づいて、宗教的ケアの意義について考察する。医療現場や被災地における宗教的ケアの実状を報告し、その効果について検討する。

今井洋介は、県立がんセンターに勤務する臨床医としての立場から、宗教的ケアの応用方法、適用範囲、宗教者との連携方法などについて考察する。

以上を受けて、コメンテータの高橋は、経文聴取の悲嘆軽減の実験結果の研究における意義、そして臨床宗教師などの宗教的ケアの価値について、超高齢社会の心理と倫理の立場から、コメントを述べる予定である。

日本・台湾・韓国における「水子供養」の歴史と現状

代表者： 淵上 恭子

鈴木由利子（宮城学院女子大）

陳 宣聿（東北大）

淵上 恭子

コメンテータ：清水 邦彦（金沢大）

コメンテータ：木村 文輝（愛知学院大）

司会： 淵上 恭子

日本における水子供養の誕生とその展開
越境する「水子供養」—台湾における嬰霊慰霊の展開—
韓国仏教の「水子供養」—都市化・核家族化への対応—

水子供養は妊娠中絶された胎児の供養法として 1970 年代の初めに成立し、1980 年代の半ばに日本全国に広まった。当初水子供養は日本特有の習俗と考えられていたが、1970 年代中盤から 1980 年代にかけて近隣の台湾や韓国に伝播し、今ではタイ、シンガポールといった東南アジアの国々にも広がっている。今日アジアに広がる「水子供養」の実相を解明するべく、本パネルで日本、台湾、韓国の東アジア三か国において「水子供養」がいつ、どこで、どのようにして開始され、それらがいかなる歴史的、社会的、宗教的背景の下で当地に広がっていったのか、報告者三者の現地調査を通して明らかにし、東アジアにおける「水子供養」の現状について考察してゆきたい。各報告の要旨は以下の通りである。

【日本】「水子供養」の語を用いた中絶児の供養は、1971 年に水子供養専門寺院の紫雲山地蔵寺が開山したことから始まった。同寺は妊娠中絶された胎児を水子（みずこ）と呼び、水子霊の供養を「水子供養」と称して、その必要性と具体的な供養方法—水子地蔵を祀ってのお詫び、償い、供養—を提示した。同寺の住職の橋本徹馬は、相談者の訴える様々な不幸や不安と妊娠中絶の関係に気づき、それらを水子に結びつけて説明した。戦後妊娠中絶が激増した時期に中絶を経験した人々が、自身の抱える解決困難な問題の原因を「水子」に集約させ、それを供養することによって問題を解消しようとしたことが水子供養の流行の要因と考えられる。そうした水子供養ブームの背景には、産科医療の発達による胎児の生命観の変化や、戦後の急激な社会変動に伴う人々のモラルの変化等があったと思われる。鈴木報告において、こうした時代背景の下で誕生した水子供養の展開過程を通観する。

【台湾】台湾では、中絶児や流産・死産児は「嬰霊」と称されている。一方、嬰霊の供養に当たる用語は定まっておらず、「水子供養」は「嬰霊供養」「超渡嬰霊」「嬰霊安奉」等と称されている。陳宣聿報告において、それ

らを「嬰霊慰霊」と総称し、台湾に広がる「水子供養」の現状について考察する。台湾において、水子供養は 1970 年代から 1980 年代にかけてマスメディアを介して流入した日本文化の一種と考えられている。内外の研究者は、「台湾嬰霊供養始祖廟」を自称する龍湖宮が日本の水子供養を台湾に定着しやすいように改編したものが「嬰霊供養」として流行したとみている。一方台湾の宗教界では、水子供養を日本由来の商業化された宗教儀式とみなし、1980 年代中盤以降盛んになった「嬰霊供養」を台湾に古くから伝わる道教の習俗と認識している。そうした状況下で、2000 年以降、道士、風水師、法師が嬰霊を解冤・修行・転生させ、依頼者の開運厄除、金運上昇を司るという新種の嬰霊慰霊が創案され、嬰霊の父母たちの注目を集めている。

【韓国】1970 年代から 1980 年代にかけて日本で流行した水子供養は、1980 年代中盤に韓国人僧侶によって韓国仏教に導入された後、「水子霊駕薦度」となって韓国全土の寺院に広がった。水子霊駕の薦度（極楽引導）をめぐる、韓国の寺院の立場は、旧暦 7 月の百中節（盂蘭盆）の際に祖先霊駕と水子霊駕を等しく寺院に祀って薦度する合祀派と、百中節とは時期を違えて水子霊駕を薦度する別途派に分かれている。淵上報告で取り上げる瞿曇寺は、別途派の延長線上に台頭してきた水子霊駕薦度の専門寺院で、2000 年以降ソウルの核家族をターゲットにした急速な教勢拡大を遂げている。「ママとパパの懺悔祈祷道場」を標榜する同寺の「胎児霊駕薦度齋」は、水子霊駕の父母と兄弟が水子霊駕を「父系親族の子孫」ではなく「核家族の子女」として薦度するもので、今日の韓国における都市化と核家族化に伴って変わりゆく韓国仏教の「水子供養」の在り様を示している。

以上の報告に対し、アジアの妊娠中絶と生命倫理の研究を手掛ける清水・木村両氏がコメントを行う。

震災後の宗教とコミュニティ—関与型調査からの再考察—

代表者：弓山 達也

民俗芸能から見える地域の課題

弓山 達也 (東京工業大)

仮設・復興住宅のコミュニティ再(々)構築における宗教の関与

齋藤 知明 (大正大)

被災地から見る外国人と宗教—カトリック教会を中心として—

星野 壮 (大正大)

復興におけるエージェント間の共生と葛藤—宗教者の関わりから—

稲場 圭信 (阪大)

コメンテータ：山内 明美 (大正大)

司会：弓山 達也 (東京工業大)

本パネルの目的は東日本大震災後の被災地域における宗教教団や宗教者の動きや宗教文化の持つ意味に注目することによって、(1)コミュニティの変容を解明し、(2)あわせてそこに宗教研究が関わる意義も検討するものである。

2010年以降、「無縁社会」や「地方消滅」というキーワードのもと、日本におけるコミュニティは、それまで以上に大きな危機に直面していると認識されている。少子高齢化、東京への一極集中と地方の過疎化、地方自治体の財政破綻など、もはや対症療法では解決できない諸問題を日本全体が抱えている。そしてこのことは同時に家族や地域に根ざしてきた日本の宗教が危機に瀕していることをも意味する。

しかし2011年の東日本大震災後、コミュニティと宗教との関係は新たな段階に入ったともいえる。祭りや芸能がコミュニティ再生のシンボルとなり、非常時に宗教施設の有する資源力が見直されつつある。孤立しがちな高齢者や子どもや外国人のサポートに関して宗教の力が期待され、ソーシャルキャピタルとしての宗教の可能性に、社会もそして宗教者自身も気づきはじめた。かかる状況に鑑み、私達はパネル発表「震災後の宗教とコミュニティ」の開催を企図した。

もちろん宗教はコミュニティの再生・復興に肯定的のみ機能するものではない。平時においては私的活動に留まっていた宗教団体や宗教者が表舞台に登場することによって、かえってコミュニティ側からの反発が惹起されたり、またそのことでコミュニティ内部での世論が二分されたりすることもあるだろう。宗教団体や宗教者が世俗の価値観とは違った角度からコミュニティに関わることもあり、これが行政やボランティア団体が目の届かない、例えば上記の孤立しがちな災害マイノリティに対する支援につながることもある。ただそのことで潜在的

レベルに沈殿していた諸課題が浮き彫りになり、寝た子を起こす的に問題がクローズアップすることも考えられる。

もともと、そのことはコミュニティに宗教が混乱を持ち込んだというより、すでに胚胎していた諸課題が震災や宗教者の関与によってあぶり出されたと見る方が妥当かもしれない。私達は震災後、被災地域のコミュニティで調査研究を続けてきた。そこでは第三者的なコミットメントよりも、程度の差こそあれ宗教者や地域活動家との協働を自覚的に志向してきた。そのプロセスだからこそ見えてきた、コミュニティに宗教が関わることによって顕在化した諸課題を整理し、そこに宗教研究が関わる意義をも問うていきたいと考えている。

具体的には弓山がパネルの問題設定も兼ねて、いわき市に伝わる民俗芸能「じゃんがら念仏踊り」が震災後に市内各地で震災以前とはやや違った意味で行われていることに注目し、そこに見られる地域住民の意識の変化やズレを解明する。続いて齋藤は釜石市や南三陸町での調査・スタディツアーを踏まえ、仮設住宅・復興住宅で支援活動を続ける宗教者の動きを、星野はカトリック教会を主たるフィールドとして、仙台教区内における外国人と宗教の関わり方の変容を取り上げ、稲場は宗教施設を地域資源とした地域防災のアクションリサーチを通して、震災後にコミュニティの抱える課題を、それぞれ考察する。コメンテータには、歴史社会学者で、日本近代の稲作言説とナショナリズムの関係性について、とりわけ東北地方をフィールドに研究に従事してこられた山内明美氏を招いた。

近年、宗教の社会貢献や被災地研究の文脈で同様の研究が多い中、本パネルはその研究上の意義をとらえ返しつつ、今一度、コミュニティにおける宗教の多側面を検討するものである。

人間を魂と受けとめる医療—医療者が信仰を持つ可能性—

医師の信仰が患者の自然治癒力を引き出す
人間を魂と受けとめる精神科医療
医療者の信仰心とトータルペインの癒し

代表者：馬淵 茂樹

馬淵 茂樹 (東京トータルライフクリニック)

福島 一成 (藤枝市立総合病院)

井口 清吾 (上尾甞生病院)

コメンテータ：加藤 眞三 (慶大)

司会：馬淵 茂樹 (東京トータルライフクリニック)

今や医療技術の進展で病から解放される可能性は広がり、日本は世界一の長寿国となったが、医療費が国の財政を圧迫する皮肉な現実も招いた。そして現代医療は、生きて悩む患者ではなく、病気だけを見て原因を取り除くことに終始する傾向を抱き、外から必要な処置を施すが、患者自身が本来持つ内なる生命力を引き出すことには意を尽くしきれていない。

重篤な慢性疾患患者や終末期患者のエンドオブライフケアやその家族のグリーフケアの重要性が意識され始め、特に東日本大震災を機に臨床宗教師の育成など、医療現場に宗教者が関与する可能性が言われ始めている。患者は、病気自体の苦痛もあるが、人生の意味や病気の意味を自問し、経済のこと、家族のこと、子供たちのこと、その行く末を慮って苦悩する社会的痛み、霊的な痛みはさらに大きい。

医療において、人間の本質を魂と受けとめ、患者の人生や霊的な痛みに寄り添えるスピリチュアルな人間観、宗教的な人間観が必要とされていると考える。特定の宗教を信じるか否かではなく、自分を超越する大いなる存在を信じることを「信仰」と定義すれば、それは宗教者のみならず、医療者にとっても避けて通れない今日的命題であろう。ここでは医療者が信仰を持つことによってどう変わり、それが患者にどう還元されたのか(患者はどう変わったのか)を報告し、治すことと癒すことが一つになる医療が持つ可能性、医療者が信仰を持つ可能性について論じたい。

「馬淵茂樹」：医学生時代に五月病にかかったことから哲学書、宗教書を読み漁り、苦悩の原因は外ではなく心の内側にあることを知った。医師4年目に網膜剥離で失明の不安と恐怖に慄いたが「なぜ網膜剥離になったのか」の原因を探るうち、人生を省みることになった。「生きる自分」から「生かされて生きる自分」への転換が起き、医療実践の目的が自己実現から抜苦与楽へと根本的に転

換した。診療では対話を重視し、患者から自然治癒力を引き出すことが治療の軸になった。そして認知症やがん、自己免疫疾患など「難病」にも治療が起こるようになった。具体的な事例と共に報告したい。

「福島一成」：精神科医として、治療者と家族が、「人間を魂と受けとめる」眼差しで患者に接した時、薬物療法だけで改善しない難治精神病症例に、改善が得られる例を、これまで10年以上に亘って発表してきた。中でも、うつ病などに見られる希死念慮(自殺願望)や自殺死の問題をどう解決するかということと、治療者自身が癒され、「人間を魂と受けとめる」眼差しを持つこととの間には密接な関係があることについて、実際例を提示しつつ考察を加える。加えて、その眼差しは、燃え尽きや絶望を越えてゆく力を、治療者に与えることについても言及したい。

「井口清吾」：終末期医療では、死にゆく患者のトータルペインを癒すことが求められるが、現在、2つの大きな問題に直面していると思う。一つは末期癌患者の肉体的な辛さや心の辛さにはある程度対応できるようになってきたが、スピリチュアルペインに対しては試行錯誤の状況である。もう一つは、その結果生じる終末期医療に従事する医療者自身の燃え尽きの問題。ここでは、医療者が信仰を持つことによって何が変わるのか。そして、これまで「人間を魂と受けとめる」人間観、人生観、世界観を持って出会った2000名を超す患者との出会いを通して開かれ始めた新しい終末期医療の在り方を、具体的な末期癌患者との出会いの様子を紹介しつつ報告したい。

◎このパネルには、患者こそが主人公とされる医療をめざしてスピリチュアルケアの重要性を唱え、医療者の信仰の必要性を痛感するがゆえに、この4月『信仰を持つ医療者の連帯のための会』を立ち上げた医師・「加藤眞三」をコメンテータに迎えて実施する。

宗教の時代としての1930年代—メディア・博覧会・反宗教—

反宗教運動から宗教復興へ
 大本教の文書メディア戦略
 1930年代の大本と博覧会の思想
 昭和初期「生長の家」における出版戦略

代表者：永岡 崇
 近藤俊太郎（龍大）
 對馬 路人（関西学院大）
 永岡 崇（日本学術振興会）
 栗田 英彦（日本学術振興会）

コメンテータ：川村 邦光（阪大）
 司会：永岡 崇（日本学術振興会）

ジャーナリスト・大宅壮一は、皮肉とともに「宗教インフレ時代」の到来を報告している。1934年のことである。生長の家やひとのみちを代表格として、多くの新宗教が「大衆の間に産卵し、孵化していく状態は、まったくねずみ算どころの騒ぎではない」と、驚異をもって記した（『大宅壮一全集 第4巻』蒼洋社、1981年）。第一次大本事件の衝撃から立ち直った大本も、このころさまざまな文化運動や政治運動によって世間を賑わせていた。もちろん天理教や金光教といった先行新宗教団体も、農村・都市部にしっかりと根を張っている。新宗教ばかりでなく、友松円諦の『法句経』講義に代表されるように、ニューメディアとしてのラジオを通じて仏教ブームが出現し、1930年代の日本は「宗教復興」と呼ぶべき状況を呈していたのである。

他方で、30年代前半は、新宗教を「インチキ」と断じて攻撃する邪教批判、さらにはマルクス主義に依拠して既成宗教も批判対象にふくめた反宗教運動が展開された時代でもあった。前者では大宅のようなジャーナリストや妹尾義郎のような仏教者らが積極的に発言し、後者については川内唯彦らの日本戦闘的無神論者同盟や高津正道らの日本反宗教同盟といった組織が結成され、短期間ではあるが階級闘争と明確に結び付いた宗教批判の論陣が張られたのである。

上に記したさまざまなアクターのうち、反宗教運動は間もなく共産主義者弾圧の嵐のなかで終焉を迎え、大本やひとのみちなどの新宗教も特高警察の厳しい監視や弾圧にさらされることになった。そして既成仏教諸宗派など、残された公認宗教は、自発的に総力戦体制へと雪崩れこんでいく。そこにおいて、宗教をめぐるさまざまな語りは、急速にカリスマ化・神格化が進んだ天皇を中心とする、「聖戦」「皇道」言説へと回収されていったかにみえる。

総動員体制前夜の、この「宗教復興」をどのように考えればよいだろうか。資本主義社会の矛盾が顕在化し、日本の国際的孤立が深まっていくなかで、精神的支柱／慰安を求める人々の心情にその原因を求めることはとりあえず可能だろう。しかし、それだけでは十分でない。肯定的であれ、否定的であれ、「宗教」をどのように性格づけ、評価するのか、また「宗教」をどのように表現し、伝達していくのかといったことについて、多様な立場からの語りが錯綜するアリーナが出現したところこそ、大きな意義が認められるのではないだろうか。そうした言論状況は明治期の「宗教」概念形成過程にもみられたが、1930年代の「宗教復興」では、新宗教の当事者たちもその表象のアリーナに積極的に加わっていき、むしろいったん形成された「宗教」概念を問い直す試みを行っていった。そして、それが可能となったのは、新しいメディアの活用によるところが大きいといえる。

本パネルでは、メディアという位相に着目しながら、1930年代の日本を宗教の時代としてとらえなおそうとする。まず近藤報告は、反宗教運動の出発からその急激な失速、そして宗教復興現象の生起に至る歴史的過程を追跡し、そこで提示された宗教批判／肯定の論理を分析・検討する。對馬報告は、大本を事例に、多面的かつ旺盛な外部向けの文書出版、頒布活動とその社会運動の展開の密接な関連に光を当てる。永岡報告は、宗教大博覧会、満蒙大博覧会、天恩郷防空展という、1930年代の大本が参加・主催した三つの博覧会を取り上げ、その取り組みがもつ宗教的・文化的意味を解説する。栗田報告は、初期生長の家の出版物を分析し、同時代の読書文化における宗教のあり方や修養文化や靈性文化との関係を踏まえ、そうした文化圏のなかで生長の家が取った戦略の特徴を考察する。最後に川村邦光が、全体を総括するコメントを行う。

アフリカ宗教の重層構造と地域的多様性—宗教人類学のこころみ—

代表者：嶋田 義仁

西アフリカ内陸社会イスラーム文明の歴史的展開

嶋田 義仁 (中部大)

東アフリカ・スワヒリ海岸キルワ島における精霊ジニ信仰

中村 亮 (国立民族学博物館)

南部アフリカ・バントゥ宗教文化における精霊マシャウ儀礼

松平 勇二 (日本学術振興会)

西アフリカ・ギニア湾岸の植民地都市アクラにおけるガ漁民新年祭

古澤 礼太 (中部大)

司会：嶋田 義仁 (中部大)

1. パネルの趣旨

サハラ以南黒アフリカには、多様かつ重層的な宗教文化が動的に展開された。

アフリカの固有宗教自体が、農耕文化、牧畜文化、狩猟採集民文化などで異なり、地域的多様性も大きい。そのうえアフリカには、イスラーム文化が西アフリカ内陸と東アフリカ海岸地域に10世紀頃から広がり、キリスト教文化も16世紀以降大西洋とインド洋の沿岸地方に広がった。しかし世界宗教は固有宗教を駆逐するのではなく、固有宗教との重層関係の形成に至った。かかる黒アフリカ宗教文化の多様かつ重層的な動的展開を、4発表によって明らかにする。

- ・西アフリカ内陸イスラーム文明の歴史的展開 (嶋田義仁)
- ・東アフリカ・スワヒリ海岸に広がるスワヒリ宗教文化 (中村亮)
- ・南部アフリカ・バントゥ宗教文化 (松平勇二)
- ・西アフリカ・ギニア湾沿岸植民地都市アクラの漁民宗教文化 (古澤礼太)

2. 西アフリカ内陸社会イスラーム文明の歴史的展開 (嶋田義仁)

サハラ交易の刺激のもと、西アフリカ内陸世界は、10世紀頃から、イスラーム的商業・都市・国家文明の形成期にはいるが、それには、黒アフリカ固有文化との関係に応じて、様々な変動と段階があった。1) サハラを舞台にした11世紀アルモラヴィッドの聖戦、2) マリ帝国の形成と皇帝のメッカ巡礼、金交易、3) ガオ帝国によるムスリム迫害、4) イスラーム帝国ソンガイ帝国形成とソンガイ帝国崩壊後のモロッコ支配、5) 牧畜民フルベ族のイスラーム宗教改革運動、6) 植民地化によるイスラーム帝国崩壊。かかるイスラーム文明の展開を論じつつ、多様性と重層性の視点による、アフリカ宗教文化の統一的理解の可能性を提起する。

3. 東アフリカ・スワヒリ海岸キルワ島における精霊ジニ信仰 (中村亮)

インド洋交易の拠点としてキルワ王国が繁栄したキル

ワ島にはイスラーム文化とバントゥ文化の融合がみられ、宗教的には、アラブ系イスラームのジン *jinn* と、バントゥ文化の精霊概念が融合したアフロ・アラブ的なジニ *jini* 信仰がみられる。ジニ世界は、島の多部族多文化を反映して多様である。ジニは憑依する。聖霊呪医が憑依儀礼を司り、教主のような勢力を有する。近年は、天使 *malaika* を守護霊としてもつ、新タイプの呪医(天使呪医)が誕生した。ジニ信仰の分析により、スワヒリ文明の動態構造の理解を試みる。

4. 南部アフリカ・バントゥ宗教文化における精霊マシャウ儀礼 (松平勇二)

南部アフリカにはバントゥ文化がひろがり、ジンバブウェのショナ族文化もその一つで、精霊による憑依文化がある。霊的存在には、天空神霊、祖霊、マシャウイ霊がある。マシャウイ霊は人間に憑依し、商業、芸術、狩猟などの才能に長けた人物は、マシャウイを持つと考えられている。マシャウイへの感謝儀礼を怠ると、マシャウイは離れ、その人の才能は失われる。霊媒師に憑依する特殊なマシャウイがあり、憑依によって霊媒師はトランス状態になり異言を話し、病人などを治療する。かかる憑依儀礼の分析により、バントゥ宗教文化の固有性をあきらかにする。

5. 西アフリカ・ギニア湾岸の植民地都市アクラにおけるガ漁民新年祭 (古澤礼太)

大西洋三角貿易の拠点として、また英領黄金海岸の首都として形成されたアクラは、植民地都市起源の近代的都市であるが、大航海時代の旧要塞がある海岸地域に漁民ガ族が分布する。ガ族は植民地文化に組み込まれて数百年、キリスト教文化が広がる都市に住むが、毎年、伝統首長を中心に新年の儀礼ホモウォ祭を行う。楽隊をしたがえた首長が街中をめぐり、トウモロコシ料理ペップレ (*Kpekle*) を街中に撒く。かかるガ族の新年祭を、①祭祀王、②聖なる食物ペップレとトウモロコシ文化の意味、③首長の巡礼路とペップレを撒く場所、の3点から分析し、植民地都市において維持され発展した新年祭ホモウォ祭りの宗教人類学的考察をおこなう。

伝統的言語文化としての神話・昔話教育

代表者：大澤千恵子

国語・日本語教育史における神話・昔話教材のイデオロギー
戦後公教育における神話・昔話教育の展開と課題
神話・昔話教育実践の現状と課題
伝統的言語文化教育における比較神話学からの貢献の可能性

石井 正己 (東京学芸大)
藤井 健志 (東京学芸大)
大澤千恵子 (東京学芸大)
松村 一男 (和光大)

司会：大澤千恵子 (東京学芸大)

平成20年度に改訂された現行の学習指導要領より、国語科教育において「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が指導事項に加えられた。その中に「神話」の文言が明記されたことで、平成23年度より小学校低学年の国語科の教科書には教材として日本神話「いなばのしろさぎ」が収録され、子どもたちは学校教育の中で他の昔話教材と同様に日本神話に触れることとなった。したがって、日本の公教育を受けた現在の中学1年生から小学2年生までの児童・生徒の多くは、授業の一環として日本神話を読むという経験をもっているということになる。その目的は、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てることである。教育を通して文化遺産を継承していくことは、文化の保持と発展に必須であり、グローバル化する社会に鑑みても日本の神話や昔話を学ぶことは大切であろう。

しかしながら、戦前の教育において神話の活用に問題があったことから、戦後教育において神話はタブー視され、全く教材化が行われてこなかったことは周知のとおりである。そのため、現場の教師は自身の学校教育の中で日本神話に触れた経験もなく、教材研究の蓄積もほとんどない状態のまま実践を行っているといえる。また、大学における教員養成の場においても、近い将来教員となる大学生達の神話や昔話に関する知識は非常に乏しく、神話教育の留意点や歴史的経緯以前の基礎的な内容に関する教育体系の確立も急務である。つまり、国語科において神話を教えることは古くからの課題と新しい課題とが入り混じって様々な問題をはらんでいるといっても過言ではない。

本パネルは、戦前の神話教育のありようを乗り越えて、これからの神話・昔話教育が進むべき方向を考えるために、民話研究・昔話教育、宗教教育、児童文学教育、神

話学の観点から多角的な考察を行い、教育界に向けた実践への提言はもちろん、諸外国に対しても神話教育の必要性和妥当性をきちんと説明できるような理論の構築を目指すものである。これらは、日本学術振興会の科学研究費助成事業における基盤研究(C)に採択された「学校教育における神話教材整備のための予備調査」の初年度の研究活動として位置付けられる。個々の発表内容は以下に示す通りである。

まず、教育史の視点から民話研究と教育の専門家である石井正己が、帝国日本が作り上げてきたイデオロギーとしての神話教育の歴史的経緯を国内とアジアならびに南北アメリカにおける実例をもとに紹介し、その問題点や今後の展望を考察する。

次に、宗教教育史の視点から藤井健志が、戦後の公教育における政府の宗教・神話・昔話の扱い方の変遷を再検討してその論点を抽出するとともに、それを踏まえて神話教育を公教育の中で行う際の課題について考察する。

さらに、宗教児童文学研究の立場から大澤千恵子が、附属小学校との連携を生かし、すでに教材化されている低学年の授業の提案とそこから系統的に発展した中・高学年での授業展開や読書活動への広がりやのありようを検討する。その際、キリスト教文化圏における伝統的な言語文化としての物語的文章が学校教育の中でどのように用いられているかの比較も視野に入れて行う予定である。

最後に、比較神話学の立場から松村一男が、伝統的言語文化教育の今後の展開の可能性を検討する。日本の伝統的言語文化を日本文化に固有の伝統として教えることに並んで、世界の他の地域、とくにアジア諸国との歴史的なつながりを指摘することが必要である。ナショナリズムを超えて伝統的言語文化を再評価する方向での活用する方法を、教育の現場に届くような形での具体的提案として示してみたい。

2016年7月4日発行

編集・発行 日本宗教学会 第75回学術大会 実行委員会

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1 早稲田大学文学学術院

E-mail: jars75th@gmail.com

HP: http://jpars.org/annual_conference/